

横浜市立 神奈川小学校 学校評価報告書 (令和元～3年度)

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きて働く知	①学校生活では高学年の行動を、授業場面ではよい考えをモデルにするように努め、子どもの自己決定の指標を明確化する。結果にとらわれずに過程を評価する指導法を定着させる。②授業研究会を核にして授業力向上に努め、「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導力を身に付ける。	①全教師の授業場を観察し、適宜、指導・助言を行った結果、徐々に児童主体の授業の在り方について浸透し始めた。また、全教師の教師主導型の固定授業観を払拭できていない。②公開授業で客観的な意見を得た。児童が主体となる「主体的・対話的で深い学び」への礎は整った。	B
豊かな心	①朝会や集会等の場で定期的に「人とかかわり」について全校児童に話題提供する。また、トラブルの原因となるSNSの存在・使用法等について保護者の意識改善を啓発する。②生活科・総合的な学習を中心に「ひと」との出会いを学習過程に組み込み、他者から学ぶ場面を増やす。	①児童の意識改善については、学校教育目標の「な」に相当する資質・能力「かかわり合う力」の意識化に向けて教職員に言葉をかけ続けた結果、児童の関わる姿が多みられるようになってきた。②教科書に頼らず、児童の心構えに即して自身で単元を創造できる教師が増えた。	B
健やかな体	①体力テストの結果を活用しながら、委員会活動等から児童主体の取組を奨励し「長なわ集会」等の全校で行う取組を定期的実施する。②学校保健委員会で取り上げるテーマについて、子どもの生活に即した課題を設定し、実生活で活かせる内容として位置付ける。	①長なわ集会に加え、持久走週間を設けて取り組んだ結果、休み時間に積極的に校庭で遊ぶ児童が増えている。②学校保健委員会では、養護教諭の活躍もあり、感染症防止意識を高めた。児童の必要感に始まる取組が実現し、学校医からもお褒めの言葉をいただいた。	A
地域との協働	①地域祭礼や行事に職員が積極的に参加する姿勢を示すほか、学校運営協議会を通して今日的な課題を共有し、地域と学校との双方向の理解を深め、さらなる協力体制を築く。②地域人材に依頼して学習場面に積極的に参加してもらえ体制を確立し、まちぐるみで児童を育てる。	①地域祭礼では、複数年が積極的に取り組んだこともあり、本校児童の多くが参加するようになり、地域からの高い評価を得た。②地域人材の開発は進み、学習に参加してもらう機会は増えたが、想定した内容までは至っていない。次年度の内容を具体的に編成したい。	B
児童理解・児童指導	①職員会議等を活用し、全職員が児童の特性や課題を共有し、個に応じた適切な指導を一本化するに努める。②学校だよりや学校説明会、懇談会などの機会を活用して、保護者に学校の目指す教育的価値を積極的に発信する。	①409名の児童をほぼすべての職員が児童の理解を共有し、個に応じた適切な指導を必要に応じて適宜行う。②学校と家庭での指導の方向性をより共通化するために、学校教育目標の趣旨を積極的に発信する。学校だより、保護者会等での発信機会を増やし、共通理解を図る。	A
幼保小連携	①近隣幼稚園・保育園との授業参観を双方向で行い、接続が円滑に進むよう情報を共有し、交流会を設定する。また、その取組について幼保小連携事業を活用して具体的に発信する。②幼児教育機関に学校側が外向き、学校の教育方針を説明するとともに、入学後の安心を構築する。	①関連行事を増やし、近隣幼児教育機関との連携を強化した。交流会では1・2年担任を中心に幼児理解を語り、教師の交流も進んだ。②幼児機関にて保護者向けスタートカリキュラム講演を行った。質問からも高い関心がうかがえた。より垣根を低く進めたい。	B
行事の見直し	①学校教育目標の「見える化」を図り、変更する行事等の意図について児童・保護者・地域等に対して学校教育目標との関連を示す。②見直し後初めて実施する体験学習、遠足等の行事を学校教育目標に照らし、次年度への具体的修正箇所を検証する。また、次年度以降の計画を具体化する。	①学校教育目標と重点研究の相互関係を「見える化」し、ほとんどの教職員が学校教育目標を説明できるようになったことは画期的である。②行事を精選する意識で行ったことで、本当に必要な行事を洗い出すことに成功した。また、学校運営協議会の意見をj得て、前後期制を断念した。	A
いじめへの対応	①学級担任を核に学年職員、児童支援専任と情報を綿密に共有し、きめ細やかな支援体制を整えて組織として迅速に対処する。②研修を受けた者が全職員に対していじめの兆候について発信し早期発見に努める。また、発生してしまった場合は専任の機動隊対応など、組織で入念に共通理解を図る。	①専任が4月に休職し学級担任に代行を命じたことで負担が増え、苦しい場面が多かった。しかし残った職員が奮闘し、いじめ認知の確率化、対応力が向上した。②認知意識は向上したが、保護者対応では苦慮した。次年度は専任の機動隊確保により丁寧に進めたい。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①子どもが主体的に学ぶ授業や細やかな児童理解等の指導について、また組織としての分掌について、校内研修を計画的に行い、経験の浅い職員をサポートする。②働き方改革プロジェクトチーム主導により、本校の実態に即した改革法を見出し、実施検証する。③計画年休を推奨し、見直しをもって業務を調整して休暇等を取ることができるようにする。	①若手の人材育成は著しい。授業力向上が進んだ。一方、中堅の人材育成はあまり進まなかった。②働き方改革は進んだ。今年度の組織矛盾を徹底的に洗い出し、次年度の組織を見直した。結果は次年度に譲るが、構造の見直しをもてた。③休職者4名の穴を埋めることができず、休暇取得は実現できなかった。	B
ブロック内評価後の気付き	中学校ブロック4校の校長が全員交代(女3男1→男4)する状況であったことをプラスと捉え1から始めることで共通理解が進んだ。それぞれが積極的に自校で育てたい子ども像を述べたうえで9年間で育てたい資質・能力を再確認し、小学校側が学校教育目標と発達段階に即して資質・能力を見直したことで、迷いなく学校教育活動を進めることができた。児童生徒交流での意見交換も活発に行うことで、児童生徒理解も進んだものと考えられる。より、情報を共有する機会を設定しながら、中学校との接続を意識した教育課程運営改善を行いたい。	中学校ブロックでの交流日に職員が往来する時間を実現できなかったが、求める児童・生徒像を共有して方法の議論を進めることができた。ブロック内・小4校の校長が人事異動なく2年目を迎えたことで、9年間で育てたい資質・能力の共有は深まったと思う。実践ベースでの話題をもてなされたことで、児童・生徒の姿を通しての検証はできなかったが、方向性の共有は深まってきていると判断できる。次年度は、本校のみ校長が変わるが、中期経営方針3年目として、今年度実現が困難だった部分も含め、9年間の学びの共有を深めたいと考える。	B
学校関係者評価	学校運営協議会も設置後3年を経過し、教育活動の内容に対してダイレクトな意見を頂戴できる有意義な機会になってきた。ここ2年、休職者が多い現状を地域の方々をはじめとした関係者に相談してきた経緯から、大胆な発想で学期制の変更(3学期制から2期制へ)、年間行事の見直し、働き方改革を提案してきた。たくさんの意見交換を行う中で、全面的に応援して下さる声を頂戴し、次年度には、その具現化を始めることに結び付いた。	若干の委員変更はあったが、学校運営協議会4年目を迎え、継続して本校の教育活動を評価してもらっている委員の評価を裏付けて改革を進めてきた。働き方改革と児童の資質・能力の育成を踏まえた学校教育目標の具現化について理解を得ており、今年度は前後期(2期)制の実現、会議日精選、WEB及びSNSの活用と改革を進めた。これまで定期的に発信してきた学校だより等の紙面を、WEB及びSNSに移行して随時デジタル発信に切り替えたことは、保護者・地域の高い評価につながった。	B

重点取組分野	令和2年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きて働く知	①学級担任の半数強が転入者で、かつ大きく平均年齢が下がった状況に鑑み、昨年度に進めた授業改善について早い段階での浸透を図り、児童主体の授業展開を進める。②「主体的・対話的で深い学び」を表す具体的な児童の姿を共有し、学年や低中高ブロックで教師間授業観察を推進する。	①日々授業改善を声に出してきたことで、実践に変容が表れてきた。特に経験の浅い教師の授業デザインをはじめ、指導力向上が認められた。②コロナ禍を言い訳にこたへないが、授業の見合いについては、あまり実現できなかった。今後、資質・能力の三つの柱について理解を深める必要がある。	B
豊かな心	①学校教育目標の「な」及び関連する中心資質・能力「かかわり合う力」の育成を推進するために、学校教育目標を各教室に掲示して共有、児童とともに付記しながら足跡を残す。②道徳科の授業改善及びベア学年活動の充実、生活科・総合的な学習を活用して他者との関わりを充実させる。	①学校教育目標の掲出を進めることができた。しかし、活用できたかという疑問が残る。コロナ禍の状況下において、「自己決定力」の育成についての指導を中心に進めることができた。②道徳推進教諭が先導して授業改善を進めた。授業内容には改善の余地があるが、共有は進んだ。	B
健やかな体	①一校一実践である「長なわ」を核としながら「運動集会」の実施や運動会の在り方を含む体育科の授業改善を進め、児童が自ら運動を生活に取り込むライフスタイルの確立を目指す。②児童にとって必要感のある課題を設定し、探究型の構造をもつことで学校保健委員会の充実を図る。	①体育科学習を含め、内容を精選して行う必要があるものを回避したこともあり、運動の日常化には届かなかった。②学校保健委員会を含め、集合型の活動を制限したため、探究的な学びには至らなかった。コロナ禍の改善状況にもよるが、今年度のものを踏襲して再度挑戦していきたい。	B
地域との協働	①より地域に根差した学習活動を展開する。社会科はもちろん、生活科や総合的な学習の地域材を開発し、双方向の「開かれた学校」づくりを目指す。②学校運営協議会の意見を尊重し、スクールゾーン対策協議会や地域防災拠点運営委員会と連携し、児童の体験活動の場を設定する。	①特定の学級の実践ではあるが、地域に根差した総合的な学習、生活科学習を展開できた。区役所、地域、大学と連携した4年生の学習が地域の活性化につながる結果をもたらした。②学校運営協議会も5回中3回の集合協議を行ったことで、具体的な方向性を見出すことができた。	A
児童理解・児童指導	①半数以上の職員が入替わったことで、児童理解をより充実させる必要がある。情報共有を必要に応じて適宜行う。②学校と家庭での指導の方向性をより共通化するために、学校教育目標の趣旨を積極的に発信する。学校だより、保護者会等での発信機会を増やし、共通理解を図る。	①児童数368名の中規模校であることから、全教職員が顔を合わせた児童指導を行える環境にある。また校内指導にばらつきはあるものの、誰もが一定の指導を行える状況になってきた。②WEBページ、公式SNSの活用により、保護者地域の閲覧数が飛躍的に向上し、好評を頂いている。	A
幼保小連携	①昨年度拡大した幼児教育機関との連携を強化するため、職員間相互による研修・交流の充実を図るほか、児童間の交流活動を設定する。②幼児教育機関に学校側が外向き、学校の教育方針を説明する機会を設定するほか、幼児教育機関の方針を理解し、スタートカリキュラムを充実させる。	①②双方の職員や幼児と児童の往復した連携活動についてはほぼ実現できなかったが、情報共有を随時行うことができ、児童理解に結び付けることができた。臨時休業の影響もあり、スタートカリキュラムを縮小して実施したが、1年生担任の力量もあって、充実した指導を実現できた。	B
行事の見直し	①昨年度、学校教育目標の具現化を図るための年間計画の刷新を図った。3学期制の前後期制変更に伴う行事日程や内容について、実施しながら教育効果の検証を図り、随時見直しを図る。②児童の必要感に基づく行事になっているかの検証を行いながら、運営改善を図る。	①新計画については、再三の変更を余儀なくされたが、求める資質・能力を核としてコロナ禍で可能な限り系統性を意識した実施した。児童の資質・能力の向上も認められるほか、保護者から好評を得ている。②行事推進については、ほぼ半数を中止したため、検証が進んでいるとは言えない。	A
いじめへの対応	①学校生活における児童の状況を具に見取り、児童が教職員に話し掛けやすい雰囲気構築する。児童の声に耳を傾け防止に努めるほか、いじめの早期発見を確実に実行して解決を図る。②児童支援専任の対応機会を保障するため、専任の授業機動隊配分を見直し、即時的な対応を可能にする。	①②この数年で初めて児童支援専任が学級担任を務めない環境を実現できたことで、専任と担任の連携も充実し、いじめ認知も的確に行った。早期発見により児童の安定につながった。保護者対応についても、専任と担任で状況に応じて方法を最適化したことにより、即時的な対応ができた。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①学級担任の平均年齢が大幅低下したことによる経験不足を補うため、ミドルリーダーがサポートする学年ブロック組織を設定し、教職員間での指導体制を充実させる。②校務分掌を劇的に変更し全員参加会議を前年度比2分の1とする。授業づくりに充たす時間を確保しつつ、学校運営上の歪がなくなるようPDCA観点で検証する。	①管理職が積極的に登場しないように努めた後半から専任を中心に好転してきたが、ミドルが若手の充実した指導にあたる教職員間での人材育成はあまり進まなかった。②会議日設定は功を奏し、週2日の会議未設定日を実現した。しかし、生み出した時間を授業づくりにあてる意識を作ることができなかった。	B

重点取組分野	令和3年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きて働く知	①昨年度に進めた授業改善については、全体的にはまだ途上である。着任する実績ある主幹教諭2名を巻き込み、児童主体の授業展開を進める。②「主体的・対話的で深い学び」の中から、具体的な子ども像を洗い出して共有を図る。そのうえで教師間授業観察を推進して指導力向上を図る。	①重点研究を軸として授業力向上に向けて取り組んできた。研究から得られたことを実感する中で、職員の意識改革が図られ、日々の授業改善にもつながった。②評価の在り方について研修を通して共通理解を図ったり、学年研等で振り返ったりしたことで、評価が授業改善につながった。	A
豊かな心	①学校教育目標「な」に関連する「かかわり合う力」の育成を推進するために、学校教育目標を各教室に掲示して活用を図る。児童とともに付記しながら足跡を残す。②道徳科の授業デザインを深化させるとともに、生活科・総合的な学習を活用して他者との関わりを充実させる。	①学校教育目標「な」に関連する「かかわり合う力」の育成を推進するために、学校教育目標を各教室に掲示して活用を図る。児童とともに付記しながら足跡を残す。②道徳科の授業デザインを深化させるとともに、生活科・総合的な学習を活用して他者との関わりを充実させる。	B
健やかな体	①コロナ禍想定の下、一校一実践で「短なわ」に変更するほか、運動会の在り方を含む体育科の授業改善を進め、児童が自ら運動を生活に取り込むライフスタイルの確立を目指す。②児童にとって必要感のある課題を設定し、探究型の構造をもつことで学校保健委員会の充実を図る。	①一校一実践で「短なわ」に取り組んだり、年間を通して食育指導を行ったりしたことで、健康な体づくりへの意識が高まった。②学校保健委員会の時間を充実させることはできなかったが、日々の健康に対する意識づくりは、コロナ禍だからこそできた部分がある。次年度は更に充実させたい。	B
地域との協働	①生活科、総合的な学習、社会科を中心に地域に根差した学習活動を展開する。ESD推進校2年目の取組の充実を目指す。②学校運営協議会の意見を尊重し、スクールゾーン対策協議会や地域防災拠点運営委員会と連携し、コロナ禍における児童の体験活動の場を模索する。	①生活科、総合的な学習、社会科の時間を通して地域に根差した学習を展開することができた。地域の学校に対する期待も大きく、協力していただいたことも大きい。②学校運営協議会もほぼ予定通り行うことができ、評価をいただきながら、学校経営に生かすことができた。	B
児童理解・児童指導	①児童支援専任を中心とした児童理解を土台として、誰もが一定の指導を行うを合言葉に一枚岩となって児童指導に当たる。②学校と家庭での指導の方向性をより共通化するために、学校教育目標の趣旨を積極的に発信する。学校だよりやSNSでの発信機会を増やし、共通理解を図る。	①かなっ子アンケートの回数を増やし、いじめの早期発見、早期対応をすることができた。児童の安全安心な学校生活に向けて、児童支援専任を中心として、児童理解に努めた。②学校だよりやSNSでの発信により、保護者や地域と共通理解を図りながら、児童の育成を図ることができた。	A
幼保小連携	①コロナ禍により昨年度は停滞した幼児教育機関との連携において、できることを模索して職員間相互による研修・交流の充実を図る。②幼児教育機関に学校側が外向き、学校の教育方針を説明する機会を設定するほか、幼児教育機関の方針を理解し、スタートカリキュラムを充実させる。	①直接的な交流はできなかったものの、児童理解のための連携は図ることができた。②児童理解のための連携をきつかけにして、スタートカリキュラムの充実のための情報交換も密にし、コロナ禍でもできる連携の在り方を模索して取り組んだ。	B
行事の見直し	①年間計画の刷新を図ったが昨年度の実現は部分的にとどまった。初めて前後期制変更に伴う行事日程や内容について、検証を図ることができずうなで、効果の検証を図り、随時見直しを図る。②児童の必要感に基づく行事になっているかの検証についても行う。	①働き方改革を意識しながらも、すべてをけずるのではなく、学校教育目標実現のために本来必要なものは何か、という視点で行事の精選を図ることができた。②安易に中止しただけではなく、形を変えたり、方法を変えたりして、児童に必要なものは可能な限り前向きに実施することができた。	A
いじめへの対応	①専任を昨年度同様授業時数を減らし、児童の状況を具体的に見取り、児童が教職員に話し掛けやすい雰囲気構築する。児童の声に耳を傾け防止に努めるほか、いじめの早期発見を確実に実行して解決を図る。②児童支援専任の対応機会を保障するため、専任の授業機動隊配分を見直し、即時的な対応を可能にする。	①かなっ子アンケートを定期的に取り、いじめの早期発見、解決に努めた。昨年度に比べ、いじめ認知についての温度が上がり、意識高く取り組むことができた。また、認知した後は解決に向けて全職員で取り組むことができた。②保護者対応については、組織的に丁寧に対応することができた。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①実績のあるミドルリーダー2名が着任したことを活用した学年人材配置を行った。ここを起点に、教職員間での指導体制を充実させる。②校務分掌を変更したものの生み出した時間を有効活用しているとは言い難い。経験が浅かったため機能させにくかった教務部を充実させ、研修を行うなどこの時間の有効活用を図る。	①経験年数の浅い職員が多い中、それぞれが切磋琢磨しながら、着実に指導力を向上させている。特に授業研によって、自身の課題や目標と向き合いながら意欲的に取り組む姿が見られるようになった。②単純な時間短縮ではなく、仕事の質をあげながら働き方改革ができるよう、仕事の進め方について意識改革ができた。	B
ブロック内評価後の気付き	中学校ブロックでの交流日に職員が往来する時間を実現できなかったが、求める児童・生徒像を共有して方法の議論を進めることができた。ブロック内・小4校の校長が人事異動なく2年目を迎えたことで、9年間で育てたい資質・能力の共有は深まったと思う。実践ベースでの話題をもてなされたことで、児童・生徒の姿を通しての検証はできなかったが、方向性の共有は深まってきていると判断できる。次年度は、本校のみ校長が変わるが、中期経営方針3年目として、今年度実現が困難だった部分も含め、9年間の学びの共有を深めたいと考える。	今年度は中学校ブロックでの交流日を一度設定することができた。授業を伴う交流を求める声が職員から多く上がり、交流する良さや共通理解を感ずることに必要性を感じていることがうかがえる。9年間で育てたい資質・能力の共有は更に深まったと感じる。次年度は、今年度実現が困難だった部分も含め、9年間の学びの共有を深めたいと考える。	B
学校関係者評価	学校運営協議会5年目を迎え、継続して本校の教育活動を評価してもらっている委員の評価を裏付けて改革を進めてきた。コロナ禍での行事の進め方、働き方改革と児童の資質・能力の育成を踏まえた学校教育目標の具現化については今年度も引き続き理解と協力を得ている。これまで定期的に発信してきた学校だより等の紙面を、WEB及びSNSに移行して随時デジタル発信に切り替えたことや、日々の子どもたちの様子を常にホームページやインスタグラムで発信したことは、保護者・地域の高い評価につながった。	学校運営協議会5年目を迎え、継続して本校の教育活動を評価してもらっている委員の評価を裏付けて改革を進めてきた。コロナ禍での行事の進め方、働き方改革と児童の資質・能力の育成を踏まえた学校教育目標の具現化については今年度も引き続き理解と協力を得ている。これまで定期的に発信してきた学校だより等の紙面を、WEB及びSNSに移行して随時デジタル発信に切り替えたことや、日々の子どもたちの様子を常にホームページやインスタグラムで発信したことは、保護者・地域の高い評価につながった。	B

中期取組目標振り返り
 校長元年となる今年度、副校長としてみてきたよさを活かし、課題と判断した部分の改善を図る学校運営を行ってきた。最重要課題とした授業改善については、児童の「主体的・対話的で深い学び」のおおろげなイメージを職員がもつことができたのではないかと自負する。授業が変わることで児童の姿も生き生きし始めてきた。また、働き方改革については、令和2年度開始時の組織構造全面改革を目標に課題の洗い出し、新たな発想の創出に取り組んできたが、ここでき次年度の組織構造を大胆に変更したが、よい見通しが立っており、大幅な改革が進むものと管理職として期待している。

中期取組目標振り返り
 前任者の学校経営を受けて導き出した本中期経営方針である。学習指導要領改訂に伴う指導観の確立やカリキュラム・マネジメントにおいて、内容を微修正しながら学校運営を進めてきた。授業改善については劇的に進んでいるわけではないが、子どもの自己決定を保障する意識は高まりつつあり、児童の主体的な学習を目指す授業になりつつある。その屋台骨となる働き方改革を意識した構造改革は進み、ハード面はほぼ形になったと捉えている。新しいミドルリーダーが一本立ち、同僚が意識を高めている。新たに他校で実績を残した主幹教諭2名を迎え、中期経営最終年に向け準備は整った。

中期取組目標振り返り
 経験年数が3年未満の職員が学級担任の半数を占める中、それぞれがそれぞれのキャリアステージで育成の視点をもって学び合える職員集団になることに力を入れて進めてきた。すべての業務において、目的意識と相手意識をもって取り組むことができるようになり、風通しのよい職場となっている。学校教育目標を常に念頭に置き、前向きに日々の業務にあたることができるよう組織力をあげていくことが、今後も引き続きの課題である。